

藤井名人の思考 読み解くと

史上最年少名人となった藤井聡太名人の圧倒的な強さの理由は何なのか。言語脳科学者と将棋AI開発者に、その思考を読み解いてもらった。



第81期名人戦七番勝負を制した藤井聡太新名人＝1日、長野県高山村の「藤井荘」



さかい・くによし
1964年生まれ。東
京大学教授。言葉な
どの創造的な脳の働
きを研究。編著に羽
生善治九段と対談し
た「芸術を創る脳」
がある。

今後どれほどAIが進歩しようと、藤井さんのような強い好奇心がなければ彼に匹敵する棋士は現れないと、わたしは考えています。
(聞き手・真野啓太)

母語のよろに身につけたセンス

藤井さんが小学1年のとき、対局後の感想戦で「この局面では、ここに歩を打たないと、こちらに勝ちがないから(歩を打った)」と説明したそうです。その話を聞いて、藤井さんは「将棋のネイティブスピーカー」だと思いました。日本語ネイティブなら、文法を教わっていない子どもでも「パンに食べる」という文はおかしいとわかる。同様に藤井さんは、前後の展開の読み筋から理屈抜きに、

良い手が悪い手がわかるのでしよう。
「棋は対話なり」という言葉があるように、会話と対局では基本的に脳の同じ部分を使っている、とわたしは考えています。言語の単語の連なりと将棋の符号の連なりには、共通した枝分かれの構造がある。単語を入れ替えて新しい文を作れるように、将棋もより良い手に入れ替えて新たな手を考えることができる。

言語脳科学者

酒井邦嘉さん

言葉を律する文法は、将棋では「棋理」。棋理にかなった手は、自分の玉を守り相手の玉を追い詰める。
棋理を見抜く最良の教材は詰将棋です。藤井さんはプロ棋士も参加する詰将棋解答選手権で小6の時から5連覇しました。唯一の勝ち筋を見極めるような抜群の審美眼を持っています。

藤井さんは人工知能(AI)で強くなったと言われますが、藤井

さんがAIを使い始めたのは中学生のプロ入り直前と聞きます。読みの深さや的確さはすでにできあがっていたと思われれます。その上で、AIが得意とする局面ごとの形勢判断を取り入れ、思考の幅を広げていったのでしょうか。
つまり、将棋のセンスを母語のように身につけた上で、さらにAIをも超えるような探索をいわずに脳を鍛え続けているのです。これは、アインシュタインの言うような「熱烈な好奇心」が将棋に對してなければできないことです。感想戦に臨む藤井さんは、勝ち負けによらず、最良の手の探究を純粹に楽しんでいるように見受けられます。